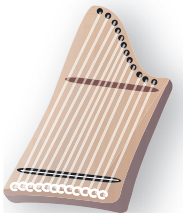
連載　ヘルマンハープ物語　第１章

日本ヘルマンハープ振興会 会長・ヘルマンハープ奏者

梶原千沙都（ちさと）さん



音楽の世界にバリアフリーの花を

「ヘルマンハープには、人の垣根を取り払い、感動をもたらす力があります」。ドイツで生まれたバリアフリーの楽器「ヘルマンハープ」の普及に奔走してきた、日本ヘルマンハープ振興会会長の梶原千沙都さん(54)。五線譜がわからなくても、簡単にメロディーを奏でられ、シニアや障害者を中心に愛好者が増えている。梶原さんが目指しているのは、音楽のバリアフリー。さまざまな人が共に奏でるヘルマンハープの響きが、社会を一つに包み込む日を思い描いている。

（文　赤坂志乃）
Text by Shino AKASAKA

演奏する人を癒す楽器

ヘルマンハープは竪琴のような楽器で、弦と板の間に専用の楽譜を差し込み、線で結ばれた黒や白の玉をたどりながら弦をはじけば、すぐに曲を演奏できる。チェンバロのような音色が心地良い。

「ヘルマンハープは、弾いている人自身が音に包み込まれて癒されます。ダウン症の子どもを思う親の愛から生まれた楽器なんです」と、梶原さんは話す。

日本でヘルマンハープを普及して10年。全国各地の教室で教え、障害者と健常者が共に奏でる「バリアフリーステージ」を行ってきた。ドイツでも確立されていなかった奏法を開発し、今年５月から６月にかけて大阪と東京で初めてのソロリサイタルを開いた。

「ヘルマンハープを、福祉と芸術の両面から一流の楽器に育てたい」。梶原さんの心にはいつも、ヘルマンハープの誕生に秘められた深い愛の物語があった。

音色との出会い

初めてヘルマンハープと出会ったのは、夫の転勤でウイーンに住んでいた2003年の春。福祉に関心のあった梶原さんは、ドイツを旅行中にニュルンベルクの介護福祉見本市を訪ねて、一つのブースで呼び止められた。「すぐに弾けるのよ。きれいな音色なの」。声に誘われて弦をはじくと、透き通った音色が胸に響いた。

当時、梶原さんは、高校生の娘が脳腫瘍の手術を控え、舅（しゅうと）の介護や身内のうつ病など難しい問題を抱えていた。先が見えないまま、懸命に家族を支える毎日。ただパンフレットだけを持ち帰った。

娘の手術が無事に終わり、2003年の暮れに夫の帰任が決まって、少しずつ家庭の問題が落ち着いてきた頃。見本市でみかけたヘルマンハープのことを思い出す。

「美しい楽器だったなあ。日本に持って帰りたい。ヘルマンハープが何か特別な存在であるように感じて、夫にも一緒に確かめてもらおうと、ヘルマンハープの開発者のヘルマン・フェーさんを訪ねたのです」。

原点は息子への愛

ヘルマンハープは、1987年にドイツ・バイエルン州にある小さな村の農場で生まれた。農場主のヘルマン・フェーさんが、音楽の好きなダウン症の息子アンドレアスさんに、自分でメロディーを奏でさせたいと、10年かけて手作りしたもの。

子どもの頃からヴァイオリンやチェロに親しんでいたフェーさんは、「息子にも本物の楽器を与えたい」と試行錯誤を重ねた。アコードチターをもとに、五線譜がわからなくても簡単に弾ける楽譜を開発。視力の弱いアンドレアスさんが弦を見やすいように楽器を立て、指が入りやすいように弦の間隔を広げた。アンドレアスさんのための１台の楽器がヘルマンハープの原点だった。

ヘルマンハープを奏でる梶原千沙都さん
（撮影　モリツ・マルチュケ）Photo by Moritz MARUTSCHKE

垣根なくす音色に感動

フェーさんを訪ねた翌日、教会で初めてヘルマンハープの演奏を聴いて、梶原さんは声を失った。

「教会に響き渡る美しい音色に言葉が出ませんでした。お年寄りも若い人も、健常者も障害者も、男性も女性も一緒にヘルマンハープを演奏して、誰もが堂々として自信と喜びで輝いていました。まるでヘルマンハープが人々の垣根を取り払っているようでした」。息子のために美しい楽器を作り出したフェーさんの深い愛情を思って、梶原さんは胸がいっぱいになった。

「日本にヘルマンハープがあれば、人生が変わる人がたくさんいるに違いない。ヘルマン・フェーさんの思いと一緒にこの楽器を日本に伝えよう」。梶原さんの中に強い思いが芽生えた。

（次号につづく）

日本ヘルマンハープ振興会　検索

コラム　子どもの背中①　Text by Mariko KATO

家族でスタート～卒業の日～
（右端が筆者）

このまま、子どものいない人生を送るのかしら？いわゆる、適齢期内に結婚した。食べ過ぎや太り気味の時、「おめでた？」という言葉をかけられた。「産めないのか？」という野次と同じ位、辛い言葉だ。

2000年、43歳の夏に念願の初産を体験。仮死で冷たくなりかけた我が子を抱きしめた。

17年がかりでやっと巡り会えた｛かけがえのない命｝。幸運にも体温が戻り、生後２週間たって新生児微笑を見た感激を、私は決して忘れないだろう。

喜びも束の間、何もかも、成長が平均値より遅いのだ。原因は21番の染色体が３本あるダウン症候群だから。

新型出生前検査が導入され、育てる自信がないという理由から中絶の対象になっている疾患だ。

私は、社会にとって迷惑な子を産んだのか。そんな複雑な心境に陥るほど、この国の環境は未だ整っていない。

手を離せば倒れてしまいそうな儚（はかな）げな子の背を支えているのは、私一人ではない。授乳時に我が子の足指をマッサージしてくれた夫が傍（かたわ）らにいる事が、何よりの力だ。

さり気ない優しさに包まれて生かされている。ダウン症があっても親にとっては普通の子。私たちを親に選んでくれた意味を自問自答する。

障がい児・者と家族は｛不幸｝なのかどうか、子どもの背中に尋ねてみよう。その肩越しに見える風景に、新しい希望の光を見出したいと思う。

（アナウンサー　加藤万里子）

季刊
Vol. 1　夏
題字　野瀬 晴風
Seifu NOSE

渚の風

創刊号
なぎさのかぜ
2014年7月14日（Mon）
発行　（株）産経新聞制作

競売にかけられたオードリー・ヘプバーンのドレス（中央、女性が着用）。約 863 万円で落札された＝2009年12月9日、ロンドン（写真提供：ロイター＝共同）

Audrey Hepburn(1929 – 1993)　イギリスの女優。ベルギー・ブリュッセル生まれ。映画「ローマの休日」でアカデミー主演女優賞に輝いた。

今、「福祉」を抜け出す時が来た

お城を出てローマの街を歩き始めたアン王女（オードリー・ヘプバーン）にとって、目にうつる全てのことは「メッセージ」でした。初めての美容院、おいしいジェラート、痛快なベスパ（スクーター）での観光…。映画「ローマの休日」の名シーンです。

そのアン王女を思い起こすシーンに一瞬、身を置きました。今春、福祉施設での入職式。会場に流れたのは、われらがユーミン（松任谷由実）の名曲「やさしさに包まれたなら」のメロディーです。

♪　…カーテンを開いて　静かな木漏れ陽の
やさしさに包まれたなら　きっと
目にうつる全てのことは　メッセージ…

道端の花に、「おはよう」と話しかける。空を見上げて、「おーい雲よ」と呼びかける。やさしさに包まれた時、私たちの心には安らぎが宿ります。ゆとりが生まれ、視界に入る、全てのものが友達や恋人になるのです。

入職式で、「支援の現場では、全てのことがメッセージに見えるような心の持ちようが大切だ」と、ユーミンの曲を通じて伝えていたのです。

ヘプバーンは、63歳で天の人となりました。その晩年には、ユニセフ親善大使として、世界中を飛び回りました。お城を抜け出たアン王女は、ローマの街角にとどまらず、青い地球を舞台にして、全ての人々にやさしいメッセージをおくり続けたのです。

福祉の現場は、きついでしょうか。いや、それは凛とした厳しさです。汚いでしょうか。いや、美しく輝いています。法令遵守に裏打ちされた、保健・衛生面の管理、心根の美しさから放たれる輝きです。

人から人への対人支援の仕事に、きれいごとは通用しません。本物がぶつかりあうからこそ、宝物がいっぱい生まれています。現場は、極めて学究的です。

私たちは、「福祉」の名のもとに「福祉の殻」に閉じこもりすぎてはいないでしょうか。今こそ、アン王女のように従来の「福祉」から抜け出す時です。「輝く福祉」を発信する時です。もっと、誇りを持つ時です。

福祉のイメージの一新、少し気取って表現すると「パラダイム転換（シフト）」。その一助を担うことが、季刊紙「渚の風」の使命だと考えています。

渚の風編集長　平田篤州

paradigm shift　枠組み転換。ある時代に支配的な物の考え方、認識の枠組みを劇的に変えること。